

かごしま 祭時記

米に込められた思いを
祭りという形で伝えたい

新田神社 権禰宜

とわた しげまさ
砥綿 茂全 さん(41)

昔は宮内地区一帯に御神田が広がっていたそうですが、今は一反程の御神田を市内の農家が御神田委員として守っており、私たち新田神社の職員も御神田の手入れや収穫を手伝っています。米は体を動かして働き、ようやく食べることができるもの。豊作を願い、収穫を神様に感謝する精神が込められていると思います。資料をきちんと残し、祭りを絶やさないことで、後世の人々に米に込められた思いを伝えていきたいと思っています。



新田神社では毎年、御田植祭の詳細を記録し、継承に役立っている。→

新田神社 御田植祭

薩摩川内市／宮内町

「奴踊」がユニークな 古式ゆかしい田植祭り

薩摩川内市の西部、神龜山の山頂に鎮座する新田神社は、農業の神、ニニギノミコトを御祭神とし、薩摩国一宮としてこの地の農耕祭祀を執り行ってきました。その伝統を守り、神社では毎年、6月の入梅の日の前の日曜日に五穀豊穡を願う御田植祭が行われ、この地方独特の踊りで県の無形民俗文化財に指定されている「奴踊」が奉納されます。

「その昔、この地方では凶作が続いたそうです。田植えをしている周りを倉野の老人が、奇妙な竿を振り回して踊り歩いたところ、その年は大豊作となったことから、御田植祭の踊りとして神社に奉納されるようになったといわれています」と説明してくれたのは新田神社権禰宜の砥綿茂全さん。今でも、神社の方々が毎年の御田植祭を記録に残し、祭りを守り継いでいます。

御田植祭は午前9時、新田神社での本社祭から始まります。その後、新田神社の末社である保食神社で早苗が清められ、白や色鮮やかな装

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から薩摩川内市の新田神社に伝わる「御田植祭」をご紹介します。

東に身を包んだ早男、早乙女が早苗籠を担ぎ、早苗を御神田へと運びます。田植え行事が始まると、その脇で、8本ほどの割竹をつけた長さ約3mの奴竿を持った男性たちが、田植え歌に合わせて、竿を回して踊ります。これが「奴踊」です。焼酎を飲んで踊り手の男性たちが酔って田んぼに倒れ込むこともあり、そのたびに見物客から笑いが起こります。「奴踊は害虫を払う姿を儀礼化したもので、邪気を払う意味があります。倉野地区と宮内地区の保存会の方々が伝承・奉納しておられるんですよ」と砥綿さん。700年続くといわれる奴踊。この古式ゆかしい行事を見ようと毎年多くの人々が訪れます。



薩摩川内市

薩摩川内市は、平成16年に川内市、樋脇町、入来町、東郷町、祁答院町、望村、上郷村、下郷村、鹿島村が合併して発足した総人口98,448人(平成26年4月1日現在)のまちです。薩摩半島の北西部に位置し、東シナ海に面した変化に富む海岸線、市街地を流れる川内川など、多様な自然が特徴です。写真は薩摩川内市国分寺町の「薩摩国分寺跡」。8世紀に大和朝廷の地方行政祭祀組織の中心であった薩摩国の国府・国分寺が置かれていた場所で、国指定史跡となっています。